祝祭日には国旗を掲げましょう。

大阪天満宮社報　第65号

てんまてんじん

年首御慶

甲午　元旦

表紙解説
菅　公　像……2頁
伊勢遷宮遥拝式……5頁
渡辺吉賢と神酒笑姿……6頁
えびす祭……8頁
梅まつり・梅酒市……9頁
大津事件と地車……12頁
ボーイスカウト富士登拝……15頁

表紙解説

「菅公像」

大阪天満宮所蔵　絹本著色
縦九九・八cm　横五七・二cm
明治時代（芳峰筆）　一幅
松浦　清（大阪工業大学准教授）

菅公の姿を描いた作品を紹介しましょう。ただし、ご覧のとおり歌舞伎役者の姿なので、菅公の役者絵と呼ぶ方が適切かもしれません。

菅公ゆかりの歌舞伎といえば『菅原伝授手習鑑』が最もよく知られています。この芝居は竹田出雲・三好松洛・並木千柳・竹田小出雲の合作になる人形浄瑠璃が原作です。延享三年（一七四六）の八月に大阪竹本座で初演され、早くも九月には京都中村座で歌舞伎として初めて上演されます。翌年の五月に江戸中村座で公演され、長期に興行を重ねる大当りの歌舞伎となりました。

菅公の筑紫配流に絡んで、旧臣や舎人の三つ子兄弟が、菅公の子息を守る物語として展開します。歌舞伎では「寺子屋」の段の上演機会が多く、人気の高い演目です。しかし、そこに菅丞相は登場しません。菅丞相の登場は「大内」「筆法伝授」「道明寺」「筑紫配所」と限られます。

歌舞伎では役者の衣装は役ごとにほぼ定まっていて、菅丞相も登場する場面ごとに特定の衣装を身につけます。「大内」は束帯、「筆法伝授」は直衣から束帯に着替えるというように、物語の展開に相応しい装束とする約束です。

本図の菅公は、梅鉢文の青い衣装です。これは黒い袍ではないため、束帯姿ではありません。束帯は参内に着用する正式な服装で、後に儀礼用の服装となりました。

この上着は直衣です。直衣はカジュアルな日常服です。直衣の下には八藤丸文を配した浅葱色の指貫を着け、浅靴を履き、右手には檜扇を持っています。しかし、腰から下げた平緒は、儀仗用の剣を佩用する際の束帯の構成要素なので、統一を欠いた着衣形式となっています。

頭部を顕わにすることも正式な装束ではありえず、必ず冠や烏帽子を被ります。平安時代には、大臣などの高位にある者は直衣での参内が許されるようになりますが、その場合は冠を被る冠直衣でした。描かれた装束が有職故実の先例に必ずしも厳密に対応するものでないのは、芝居装束であるためと判断されます。

菅公を露頂の直衣姿として描く作品に、春好斎北洲筆「三代目中村歌右衛門の菅丞相」（大阪・阪急学園池田文庫所蔵）や春好堂よし国筆「三代目坂東三津五郎の菅丞相」（同）などがあります。いずれも大振りの梅鉢文を配する直衣に指貫とする装束で、平緒を下げ、本図と類似する表現であることが注目されます。

それらは「道明寺」の段を描いた錦絵です。芝居の「道明寺」は、九州流罪となった菅丞相が伯母・覚寿の土師の館に立ち寄る場面です。人気役者の演じる菅丞相の錦絵は、この演目が江戸時代の庶民にいかに支持されたかを物語っています。

〈さすれば、本図の役者名をしばし伏せ置くは如何に、と不審の立つも道理なり。サア詮議仕らん。…。

とはいうものも、役者名は残念ながら不明です。顔には薄く隈が施され、微妙な陰影が奥行の効果をもたらしています。この手法は江戸時代の錦絵とは基本的に異なるもので、明治以降に本格的に受容される西洋式の陰影法です。

画面右側に本図を描いた絵師の名前が墨書され、朱の印影も認められます。墨書は「芳峰」と、また、印影は「貴翠」と判読されます。

江戸時代後期の著名な浮世絵師・歌川国芳の系譜に、歌川芳梅がいますが、その門人に歌川芳峰を名乗った大阪の絵師がいます。玉亭と号して錦絵新聞に活躍した玉亭芳峰も明治中期の活躍で、本図を描いた絵師を歌川芳峰すなわち玉亭芳峰とする可能性は高いと推測されます。

この絵が大阪天満宮に奉納された理由は不明ですが、生気乏しい顔、青い衣装、正面観などは役者の訃報を知らせる死絵の可能性を示唆します。正月早々縁起でもないと思し召しの御仁は、菅公が天神となった経緯を思い起こしていただきたい。菅公が死して天神となり、皇居の守護神となったように、この役者絵には歌舞伎界の守護神としての姿が投影されていると考えられます。

一昨年、昨年、中村勘三郎と市川団十郎が他界しました。しかし、新装開場した東京の歌舞伎座は、先日、来場者百万人を達成しました。上方歌舞伎の守護神を描いたともいえる本図は、芸能の歴史と未来にとって極めて重要な作品です。

北野天満宮一條天皇行幸始祭
当宮の巫女舞も御奉仕

去る十月二一日、北野天満宮において一條天皇行幸始祭が御斎行されました。

北野天満宮は、「北野の天神さん」の愛称で広く親しまれ、例年、全国各地より、受験生をはじめとする多くの方々が参詣する神社であることは周知のところです。

また同社は、菅原道真公の御神霊を神としてお祀りした天神信仰発祥の地であり、全国にある約一万二千社の天満宮・天神社の宗祀であります。

永延元年（九八七）には、一條天皇より勅祭が執り行われ、「天満天神」の御神号を下賜され、寛弘元年（一〇〇四）には初めて一條天皇が行幸なされました。以降平安時代に二十数度に亘り歴代天皇の行幸が行われるなど、皇城鎮護の神、国家護持の神として朝廷より篤い崇敬を受けてこられました。

この度、北野天満宮では、御創建以来の崇敬の歴史を鑑み、六十有余年に亘り中絶しておりました「一條天皇行幸始祭」を御再興されたわけです。

この重儀再興に伴い、当宮に巫女舞「紅わらべ」の奉奏ご奉仕の依頼がございました。

この巫女舞「紅わらべ」は平成十四年御神忌千百年大萬燈祭を奉祝し、全国天満宮梅風会が企画、当宮主幹のもと作られた神楽舞で、菅公が「あこ」と呼ばれておられた五歳のときに詠まれた御詩

「美しや　紅の色なる梅の花
　あこが顔にもつけたくぞある」

に、元宮内庁楽部長芝裕靖先生が作曲・作舞されたものです。

当日は当宮神職、巫女、神楽教室受講生、関係楽人にてご奉仕させていただきました。

この度の一條天皇行幸始祭御再興を機に、更なる御神意の発揚と全国に鎮座する天満宮・天神社、天神信仰の発展を祈念申し上げます。

今年の干支絵馬
甲午（きのえ・うま）

昨年の干支は「癸巳（みずのと・み）」でした。家族が、職場が、あるいは地域のコミュニティが、さらには国家が、一致団結して、新たな社会・生活を切り開くべき年でした。

さて、今年は「甲午（きのえ・うま）」です。

「甲」は、草木などの新芽が薄い包皮を破って頭を出した姿を表す象形文字です。これは、自然の機運に応じて、よろしく旧来のしきたりや陋習を破り、革新の歩みを進めねばならないことを意味しています。ちなみに「甲」は十干の最初に置かれ、「始める」の意味を含んでいます。

「午」は、初めの二画で地表を、下の二画で上昇を表し、全体では「忤」と同じく「背く・逆らう」という意味を持っています。

ですから「甲午」の今年は、これまでの悪い慣例や習慣にとらわれることなく、強い決意をもって新しい体制や風儀を生み出すべき気概が期待されます。皆様におかれましても、これまでに積み重なってきた悪弊を取り除き、新たな歩みを始められますことを祈念しております。

（安岡正篤大人の著書より）

平成二十六年元旦　　大阪天満宮

式年遷宮の奉仕を終へて

権祢宜　川井　義晴

昨年は、第六十二回神宮式年遷宮の年でした。去る十月二日には内宮、五日には外宮にて、遷御の儀が斎行されましたことは、皆様の記憶に新しいことかと存じます。

この皇家第一の重事、神宮無双の大営に、私は光栄にも臨時出仕として、内宮のご奉仕をさせていただくことができました。当初このお話を頂いた時には、私のような者がご奉仕させていただいても良いものかと思案も致しましたが、このような機会は二度とないと考えお受けすることにいたしました。大阪の青年神職の代表として誠心誠意のご奉仕が相叶いましたのでここにご報告したいと思います。

●十月一日、川原大祓

午前十時三十分に伊勢の修養団伊勢青少年研修センターに集合し、潔斎をして昼食をいただきました。午後十二時より神宮神職の祭庭係から祭儀中の心得及び作法についての説明を受けました。この後、少憩をとり、次に川原大祓の祭場にて習礼を受けます。時刻になって神宮より賜った装束を着装し、諸員より少し前に参進しました。午後四時には、祭主の池田厚子様を先頭に、大宮司以下神職奉仕員が参進し、川原大祓の儀が斎行されました。

我々の所役は辛櫃奉舁というお役で、修祓から始まり祝文を奏上した後、御装束神宝の辛櫃二十台をそれぞれが正宮大床下まで奉舁しました。しかし、その重量が殊のほか重く、容易に奉仕できるものではなく心身ともに過酷な御奉仕となりました。

余談になりますが、臨時奉仕員の中には白衣白袴を着けた歌手のさだまさしさん、藤井フミヤさんらの姿も見受けられました。お二方は一日の川原大祓から二日の遷御の儀まで我々と同じ臨時出仕としてご奉仕されたのですが、終始真摯な態度には心打たれるものがあり、立派にご奉仕されておりました。

●十月二日、遷御之儀

遷御之儀当日は、午後から祭庭係の説明と所役毎の各所での習礼を受け、私は神社本庁統理・総長など供奉員の松明を奉仕いたしました。午後五時二十分に式外参列員、同三十分には参列員が参進され、私は薄暮の午後五時四十分頃に、第一鳥居より正宮外玉垣御門まで供奉員とともに参進し、南宿衛屋前にて待機となりました。

その頃には日も沈んでおり、そこへ秋篠宮文仁親王殿下が御着到あそばされ、午後六時、報鼓と共に勅使・臨時祭主の黒田清子様・大宮司以下神職が参進されました。

浄闇の中、太玉串行事に続いて勅使・祭主以下が内院へ参入され、午後八時、鶏鳴三声、出御奉唱と共に渡御が始まります。丁度その時、静寂の中、遠くからザワザワと木々の音が聞こえ始め、御列が中重に差しかかる頃、一陣の風が御正宮を通り過ぎていきました。その場の誰もがこの神秘的な体験をしたのではないかと思います。

「御」を覆う絹垣が前を通過し御列の最後尾には私達も加わって新宮まで供奉致しました。そして無事入御され勅使・祭主以下が退下し、遷御の儀が滞りなく斎行されました。まさに〈浄闇の中おこなわれる静寂な光景〉としか表現し得ない神事であると感じました。

今まで御遷宮のことにあまり知識がありませんでしたが、今般の御奉仕によって、多くのことを理解する事ができ、今後の神明奉仕にも役立つ貴重な体験となりました。

また、他府県の神職とも親交を深めることもできました。このような御神縁を与えて頂いた大阪府神社庁寺井庁長様をはじめ関係各位に心から感謝申し上げたいと存じます。

写真：神宮司庁

式年遷宮

外宮遷御の儀に供奉させて戴いて

宮司　寺井　種伯

平成二十五年は神社界にとってたいへん意義深い年であった。五月には出雲大社六十年の式年遷宮、六月には熱田神宮創祀千九百年祭、十月には第六十二回神宮式年遷宮と神社界挙げて奉祝の一年であり、全国の書店には遷宮関連の書物が机上を賑わせていた。

出雲大社・熱田神宮の祭儀には奉拝者として参列させて戴いたが、神宮式年遷宮には供奉員として外宮遷御の儀にご奉仕させて戴く栄を与えていたゞいた。

十月四日、午後より致斎（もの忌み）に入り、当日は午後より入念な習礼が行われ、午後四時三十分より着装、夕暮時神楽殿前に列立、先導に続き参進、内玉垣左側に伺候する。（右側には秋篠宮文仁親王殿下）

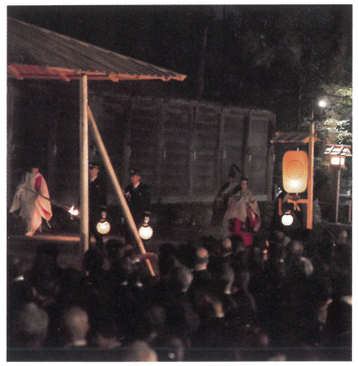
浄闇と静寂の中、庭燎のわづかな明りとぱちぱちと薪の弾ける音、霧さめの中、時折鹿の鳴き声、さながら悠久の音の佇いの中、時空の世界に引きもどされた感！

壱千参百年有余年を溯り第四十一代持統天皇の時に始まり今日、百二十五代平成の帝の思召しのもと、同じ「形」が継承され、六十二回目の遷御の儀が行われんとしている今、私自身がその御列に供奉させて戴こうとしている。

出御を知らせる「カケロー、カケロー、カケロー」の鶏鳴三声にふと現に返る。奏楽、警蹕に続き絹垣を目の辺りにし立礼深揖、後に従う。順路左側に四千五百余人の奉拝者が息をひそめ拝む姿を感じつつ入御、真に感激の極みであった。

なにごとの　おわしますかは
しらねども　たゞ有がたさに
涙こぼるる

の歌を口ずさみつつ神楽殿にもどる。満ち足りた思いを胸に明日の奉幣祭の詳細を聞き、神宮会館へ帰路の途についた。



写真：神宮司庁

遷御之儀　遙拝式

十月二日午後八時、伊勢の神宮で内宮御正殿の遷御之儀が斎行されましたが、これに合わせて、全国の神社でも同時刻に遙拝式を斎行いたしました。当宮でも、宮司以下祭員が境内の遙拝所において奉仕いたしました。

当日は遙拝所をお清めし、神宮の方角に白幔を引き廻らせ、灯台などの調度や祭器具が舗設されました。

定刻には、宮司以下奉仕する祭員が参進、修祓に続いて宮司が遙拝詞を奏上しました。次に宮司が玉串を奉って拝礼し、諸員はこれに合わせて拝礼を致しました。

祭儀の所要時間はそう長くはなかったのですが、神気の満ちた空気感の中で厳粛に斎行された神事でしたので、いつになく緊張感を覚えたのは確かでした。

当宮は都会の街中に位置するため、遙拝所は公道にわりと近いところにありますので、いつもなら車の騒音などが聞こえてくるはずなのですが、不思議なことに祭儀中は随分と静かでした。その後も平素よりは交通量も少なかったようです。

神宮における遷御之儀はテレビなどで放送されていましたので、自宅で拝見された方が多かったのか、通りの人影も随分少なく感じました。気のせいでしょうか。

社家・渡辺吉賢と「神酒笑姿」

―平賀源内「神酒天神」の投影―

高島幸次

一、大坂の三大戎

当宮の「天満天神えびす祭」は、平成十九年（二〇〇七）の復興から今年で八年目になります。江戸時代には「蛭児（えびす）尊遷殿神事」の名で毎年正月・五月・九月の十日に斎行され、なかでも正月の神事は、今宮戎、堀川戎とともに大坂の〈三大戎〉として大いに賑わっていました。

文化十一年（一八一四）刊の『繁花風土記』には、正月九日の「宵戎」の項に次のように記されています。

宵戎とて今宮へ参詣す、此日よりいろ〳〵のたからを笹ゆひ付けて売る所ニてハ堀川、又天神社内

「天神社内」とあるのは、境内の「蛭児尊遷殿」で行われていたことをいいます（当時は戎門を入った左手にあったが、今は境内の西北に移転）。『繁花風土記』の「初天神」の項も十日戎の賑わいに触れています。

初天神とて天満へ参詣引きも切らす、市中はもちろん近在までも夥しく出る、その上、寺子屋は弟子子供引きつれ全て参詣す、色里は上下の差別なく綺羅をあらそい嚝（こう＝叫ぶ意）とす、近年ハ十日戎の如く竹輿を飛して群集の中をおし分け矢を射る如く往来す

近年の初天神では、十日戎を真似て、華やかに着飾った新地の芸妓衆が宝恵駕籠を繰り出したというのですから、十日戎のほうが古くから賑わっていたことがわかります。

二、十日戎と「神酒笑姿（えみす）」

このような「十日戎」の賑わいについては、画像「神酒笑姿」が大きな役割を果たしました。寛政十年（一七九八）刊行の『摂津名所図会』（初版）に次の記載がみえます。

蛭子祠は菅神真筆の像を安ず。神酒を供ずれば御顔紅葉したまう。かかるが故に神酒笑姿（えみす）とも称す。正月十日群参す。

「蛭子祠」とは「蛭児尊遷殿」のこと。そこに掲げた菅公御真筆の戎像に御神酒をお供えすると、そのお顔が酔ったように赤くなり、その不思議に引かれて人々は群参したのです。四年後の享和二年（一八〇二）の「十日戎」には、本殿の大鈴の釣金が擦り切れて落ち、子どもの頭をかすめるという事件が起きました。この大鈴は、寛政九年（一七九七）に「天神講」が奉納したものですから、数年のうちに釣金が擦り切れるほど当宮は賑わっていたのですね。

三、平賀源内の「神酒天神」

ところで、御神酒を供えると頬を染める画像といえば、あの平賀源内（一七二八～七九）考案の「神酒天神」が思い浮かびます。源内の故郷である香川県さぬき市には「平賀源内記念館」があり、一二歳の源内が制作したと伝える画像「お神酒天神」が展示されています。東京江戸博物館の特別展『平賀源内展』の図録からその解説を引用しましょう。

「お神酒天神」（平賀源内記念館蔵）

お神酒天神　伝　平賀源内

源内が12歳のとき作ったといわれている軸物仕立てのからくり。だれかが、この天神像の前にお神酒を供えて手を合わすと、わずかな隙に裏で糸を引く。すると、裏側の赤い紙が引き上げられ、薄くしている天神の顔の部分に来て透けて見え、まるでお神酒を飲んだように、天神の顔に赤味がさすという仕掛けになっている。

客人がこの画像の前にお神酒をお供えしようと目線を下げたときを見計らって赤い紙に結ばれた糸を引き、顔を赤く染めるカラクリだったようです。のちに発明家として名をなす源内らしい工夫ですね。

四、当宮の神主・渡辺吉賢

そして、当宮の「神酒笑姿」は、この源内のアイデアがヒントになったと思われるふしがあるのです。それは、当宮の社家であった渡辺吉賢（一七〇三～？）と源内の交流です。吉賢は、幕末大坂の著名人名簿ともいうべき、安政二年版（一八五五）『浪華郷友録』の「聞人」（有名人）の項に次のように記されています。

渡部主税　菅原吉賢　号無棄斎、影馴亭、又花鈴、以好事聞

「無棄斎」「影馴亭」「花鈴」などと号した吉賢は、珍しい変わった物事を好む「好事家」として有名でした。三都の名物を記した安永六年（一七七七）の『富貴地座位』も、吉賢を次のように紹介しています。

渡邊氏の異物あつめなんど、又は蒹葭堂の唐好もともに同うして、萬物に事をかゝずありなんとも（下略）（13）

当時の吉賢は、有名な木村蒹葭堂（一七三六～一八〇二）に並ぶほどの好事家として知られた存在だったのです。現在その研究は進み、有坂道子氏は、蒹葭堂の「大坂における友人」として吉賢・吉豊父子を第一に挙げ、上杉和央氏は、一八世紀における吉賢を中心とした「図を好む」人々のネットワークを考証されています。そして、上杉氏は吉賢について「地図のみを収集するような性向ではなく、貝類を中心として、植物、鉱物、菌類と多種多様な範囲に関心を広げ、収集を行っていた人物」と評しています。

五、吉賢と源内の交流

宝暦一〇年（一七六〇）、源内は高松藩主から貝の標本収集を命じられ、その必要から『五百介図』を探していました。『五百介図』は、京都の商人・吉文字屋浄貞が禁裏に献上した五百種ほどの貝の図譜です。吉賢がその写本を所蔵しており、同年六月に源内は吉賢を訪ねています。のち源内は、明和元年（一七六四）にその写本を考訂した『浄貞五百介図』の稿本を発表しますが、その自序には吉賢を訪問したときの様子を記しています。

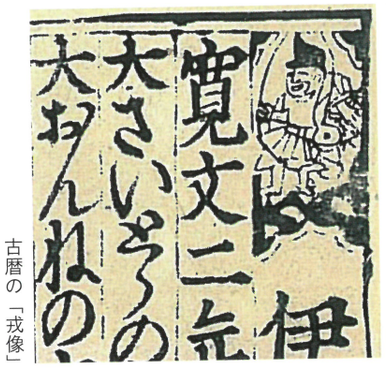
天満神の社の神主渡邊のちから（主税）てふ人、かのふみをもたりと聞て即行てとへは、いとこのめる人にてはやくこそつたへて書置たるめれ

この交流を通じて、源内は「神酒天神」のアイデアを吉賢に披露したと推測されるのです。天満宮を訪れた源内が、吉賢との歓談中に「神酒天神」の話題が出たに違いない。

六、吉賢神主古暦頂戴帖

では、吉賢は天満宮の主祭神である天神ではなく、なぜエビスの画像に赤面の噂を付与したのでしょうか。実は、吉賢にはエビスに特別な思い入れがあったのです。それは当宮御文庫に収められた『吉賢神主古暦頂戴帖』によって窺うことができます。

この立派な装丁の折本は、宝暦三年（一七五三）の宵戎に、吉賢が蛭児尊遷殿で古い暦を見つけたことを祝うものです。同帖冒頭の説明によると、同年正月九日に吉賢は「恵美須社」（蛭児尊遷殿）の階段の下から、寛文二年（一六六二）の「古暦」を見つけ、そこに「恵美須神形」が描かれていたことを大喜びし、それを頂戴したと言います。



古暦の「戎像」

また、周囲の人々も祝福の夷歌（狂歌）を寄せています。このときの自他の歌を貼り交ぜ、御文庫に収めたのが『吉賢神主古暦頂戴帖』なのです。この古暦は、伊勢国飯高郡丹生の賀茂杉太夫が発行したもので、当時としては特別に珍しいものではありません。その巻頭に「伊勢飯高郡にう加茂杉太夫」とあり、その行頭に「戎像」、行末に「大黒像」をあしらいますが、二像ともに、わずか一五㎜×一〇㎜程度の小さなイラストであり、何故に大騒ぎして立派な折本に仕立て、御文庫に奉納したのか解りません。九二年も昔の暦だったからなのか、それとも好事家ゆえの独特の感性が働いたのでしょうか。

吉賢が大喜びし、周囲から祝福されてから三年、吉賢は源内の訪問を受けています。「神酒天神」のアイデアを聞いたとき、天神ではなく、思い入れの深いエビスにそれを付与して、その噂を広めたのでしょう。その後、数年のうちに噂は広まり、先述の『摂津名所図会』の「正月十日群参す」の記載になるのです。

そして、「天満天神えびす祭」復興の翌年、平成二一年には、福笹につける吉兆（縁起物）として、絵馬型の『御神酒笑姿』が準備されたのです。

天満天神えびす祭

本年も一月九日～十一日の三日間に「天満天神えびす祭」をご斎行申し上げます。復興後八回目となる今回も、様々な行事を斎行し皆様のお参りを心よりお待ち申し上げております。

■第四回招福娘代表選考会開催

例年、えびす祭にお参りの皆様方に「笑顔」と「元気」と「福」をお届けする祭の華、「天満えびす招福娘」が新たに決定致しました。

昨年十一月二十三日に第一次面接を行い、応募総数約四〇〇名の中から二十名の招福娘を選出致しました。

その後の三十日には、境内の梅香学院大教室において研修会が開催され、二十名の招福娘たちが、ご奉仕の心得や装束の着装、さらには御鈴の振り方などを学びました。

同日午後からは、天満宮会館孔雀の間にて第四回代表選考会が開催されました。各選考委員の皆様が見守る中ユーモア溢れる自己PRが続き、例年にも増して賑やかな選考会となりました。

招福娘代表の栄冠に輝いたのは、大阪大学三回生の曽莉莎（ちゃん・りさ）さん（吹田市）、同四回生の宮井孝子（みやい・たかこ）さん（堺市）、近畿大学四回生の中田好美（なかた・このみ）さん（東大阪市）、立命館大学一回生の村﨑真彩（むらさき・まあや）さん（大阪市）の四名です。

右の四名には、代表の証である「代表襷」が寺井権宮司より手渡され、それぞれに意気込みを述べられました。

今年のえびす祭では、この代表四名をはじめとする二十名の招福娘が、お参りの皆様に大きな福をお届けすることでしょう。

■招福娘えびす祭広報活動

十二月十四日、招福娘が初のお役目として、OAPタワー・クリスマスイベントに参加致しました。また、十二月十八日にはマスコミ各社を表敬訪問し、翌朝の各紙面には恒例の「えびす締め」を打つ姿や、縁起物をお贈りする様子などが掲載されました。

十二月二十日には、松井一郎大阪府知事、橋下徹大阪市長を表敬訪問し、縁起物の福箕、御神酒笑姿の末廣をお贈り致しました。

■御神酒笑姿石像奉納

十二月十九日、現守口市長の西端勝樹様より「御神酒笑姿石像」を御奉納賜りました。

このえびす様は、縦八〇㎝、横八〇㎝、お座りの台座を含めると縦一八〇㎝にもなる大変大きな石像です。

右手に杯を持ち、左手には漁業の神を象徴する大鯛をお抱きのえびす様は、当宮「戎門」（西側）にお鎮まりになられました。

本報第五十三号で「えびす祭」の復興を記念し、戎門（東側）にその由来碑を建てた事をご紹介致しましたが、この度の御神酒笑姿石像の御奉納により、まさに「戎門」の完成をみたわけです。

今年のえびす祭りにはこのえびす様がお参りの皆様方をお出迎え致しますので、どうぞ戎門よりお参りください。

■堂島・北新地えびす詣招福行列

宵えびすの前日、一月八日（水）には、第六回堂島・北新地えびす詣招福行列をご斎行致します。

当宮青年親睦会（土居由憲会長）を中心に、九日からのえびす祭りの前景気を盛り上げます。

第十一回 てんま天神梅まつり

今年は「盆梅と名宝展」

当宮では、天神様の愛梅の心を偲んでいただこうと、平成十六年より「てんま天神梅まつり」を開催して参りましたが、今年で第十一回を迎えます。

昨年は第十回を記念して、梅に加えて松の盆栽も展示させて頂きました。平安時代に成立した天神信仰では、当初は松をシンボルとした故事を踏まえてのことでした。

第二クールの初年に当たる今年は、これまでの「盆梅」に加えて、当宮所蔵の天神画像や奉納絵画を展示する「盆梅と名宝展」に模様替えして皆様に楽しんで頂くことになりました。長年にわたり当宮に奉納された絵画のなかには、円山応挙の作品を初めとする数々の名品があります。なかには、今回が初公開の作品も展示する予定です。

例年、気候や梅の開花時期などを考慮して開催期間を変えておりますが、今年は、二月十五日～三月九日に開催いたします。このうち、夜八時まで拝観いただける夜間拝観日を二月十六日、三月一日の二日間に設けました。

二月十六日には旭堂南陵師による「講談」と、朝暘会館奉仕の「勧進御能」、三月一日には当宮神楽教室の生徒たちによる「神楽」が夜間にございます。なお、「勧進御能」は別料金で予約も必要ですのでお心積もり下さい。

また、期間中は境内でも様々な催しがございます。例年たくさんの人で賑わう「梅酒大会」は、梅まつりの開始と同時に始まり、三月九日の表彰式で、今年の日本一の梅酒が決まります。さらには、全国の各県から参加される地域観光物産展では、ご当地のおいしいものや、珍しいものをお求めいただけます。

その他の催しも趣向を凝らしたくさんの参拝者が来られるのを心待ちにしております。

「盆梅と名宝展」

二月十五日(土)～三月九日(日)

◇主な出品絵画

円山応挙『敲氷煮茗』
円山応挙『波濤図』
森一鳳『梅に孔雀図』
上田耕甫『能楽翁舞図』
上田耕冲社中の『花鳥図』十幅

◇様々なプログラム

◎オープンカフェ
二月十五日(土)～三月九日(日)

◎てんま天神梅酒大会
二月十五日(土)～二十三日(日)

◎骨董市・陶器市・アートクラフト市
二月二四日(月)～三月二日(日)

◎地域観光物産展
三月三日(月)～三月九日(日)

◎振る舞い梅餅
三月九日(日)十時～

◎梅まつりアームレスリング大会
三月十六日(日)十一時～十六時

◎水墨画奉納式
三月八日（土）十三時三十分～

浪速菅廟吟社詠草

雪稜　松村暁二　撰

今回は新星を御紹介いたします。新星と申しましても経験豊富な方もいます。

五月課題　竹裡長嘯

貴山　忠津清治　八尾市

獨領清風氣色親　幽居倚几一騒人

閑吟長嘯思詩聖　脩竹千竿隔俗塵

〔訓読〕独り清風を領して気色親しみ、幽居几に倚る一騒人。閑吟長嘯詩聖を思えば、脩竹千竿俗塵を隔つ

〔語釈〕気色＝ありさま。幽居＝俗世間から離れた住まい。騒人＝詩人と同じ。長嘯＝口を窄めて声を出す健康法。脩竹＝細長い竹。千竿＝竹が沢山ある。俗塵＝俗世間のこと。

六月課題　插秧風景

六岳　丹羽博之　交野市

雨後涼風起碧漣　一心踞地没青煙

勞多稼少又無奈　遮莫辛酸遺美田

〔訓読〕雨後の涼風碧漣を起こし、一心地に踞ひ青煙に没す。労多く稼ぎ少なきも又いかんともするなし、遮莫辛酸するも美田を遺さん

〔語釈〕碧漣＝空の色を映したさざ波。距＝腹ばい。青煙＝靄のような物。ここでは秧のこと。無奈＝どうすればいいのかわからない。遮莫＝自然に任せること。仕方が無い。辛酸＝辛いこと。美田＝美しい田圃。

八月課題　納涼酒筵

阿夜女　小久保美津子　蕨市

紵衣酌酒納涼過　江上舟行共弄波

搖影蓮花千樹柳　黄昏橋畔美人歌

〔訓読〕紵衣酒を酌んで涼を納めて過ぐ、江上の舟行共に波を弄す。影に揺れる蓮花千樹の柳、黄昏橋畔、美人の歌。

〔語釈〕紵衣＝夏衣。麻織物。弄波＝波を弄ぶこと。かき分けること。蓮花＝蓮の花。千樹＝多くの樹。ここでは柳。黄昏＝たそがれ。橋畔＝橋のたもと。

九月席題　新涼喜雨

美舟　石川　繭　高松市

閑庭木葉露華浮　銀漢星明月一鉤

蟋蟀鳴嚶殘雨後　新涼如水意悠悠

〔訓読〕閑庭の木葉露華浮ぶ、銀漢の星は明かにして月一鉤。蟋蟀鳴嚶残雨の後、新涼水の如く意は悠悠たり。

〔語釈〕閑庭＝静かな庭。木葉＝木の葉のこと。露華浮＝露が浮かぶこと。銀漢＝天の川のこと。蟋蟀＝コオロギ。鳴嚶＝鳴くこと。詩経に覧る。残雨＝やみかけの雨。新涼＝始めて涼しさを感じること。意悠悠＝心がゆったりと落ちつくこと。

梅香学院文化祭

当宮境内の梅香学院では、和裁や書道など、和風なものからバレエにいたるまで、さまざまな教室が開かれています。「芸事の神様でもある天神さんのお膝元」ということで、沢山の生徒さんたちが、楽しく習い事をして下さっています。

そんな皆様の作品を展示する文化祭が毎年行われておりますが、昨年も十月二十六日と二十七日の二日間にわたって「梅香学院文化祭」が行われました。生徒さんやご家族ご友人、さらに近隣の方々もお集まりになり、アットホームな雰囲気での発表会を迎えることができました。

両日に展示を行ったのは和裁・着付け・書道・華道の教室です。生徒さんや先生方が普段の成果を出し切って、縫い物や着付け、色紙や掛け軸などの書、華やかな生け花などを展示し、梅香学院が彩りに満ちあふれました。

また、それらの展示物以外にも、一日のみの発表会も行われました。

二十六日は、バレエの発表会が十五時から、ピアノの発表会が十六時から行われ、観客の目を楽しませて下さいました。

二十七日は、十一時半から十五時まで茶道の教室による呈茶席が設けられ、ゆったりとした時間を味わうことができました。

梅香学院の文化祭は、毎年行われております。まだご覧になっていない方も、是非、本年秋の文化祭を見にお越し下さい。ご興味をお持ちになった方は、教室に入って次回の文化祭での発表者になってみてはいかがでしょうか。

深田直城画伯の御孫様が来宮

四月二二日、深田直城（ちょくじょう）画伯のお孫さんである鈴木紀代子様と、ご夫君の茂和様がお越しになりました。

深田直城画伯は、幕末の文久元年（一八六一）、近江（滋賀県）膳所に生まれ、明治から昭和前期に活躍された日本画家です。内国勧業博覧会に「鳴門図」、全国絵画共進会に「鮮魚」などを出品。昭和二二年（一九四七）没、享年八七歳でした。

大阪において後進を指導されたこともあり、当宮にも作品が二点奉納されています。画伯の三男様のご長女にあたられる紀代子様は、その二点を拝観するために来宮されたのです。紀代子様は、晩年の画伯が大阪のお住まいの大きな和室で、作品に向かっているお姿を、よく覚えていらっしゃるそうです。

今回ご覧いただいたのは『流鏑馬図』軸装と『紅白梅の図』襖絵です。当宮の宝物は、原則として公開しておりません。しかし、ご縁者の来宮に特別の便宜をお計らい致しましたところ、鈴木様ご夫婦も感慨深くご覧になっておられました。

紀代子様の初節句には、画伯がお雛様をお描きになり、軸にして贈られたそうで、今も大切になさっておられるそうです。

長い年月を経てお祖父様と再会できたようだと、ほんとうに嬉しそうになさっていました。お祖父様に対する尊敬の念が神様に通じてお導きがあったのでしょうか、不思議な御神縁を感じたことでした。

喪中について

社務所　電話番だより
よくあるお問い合わせ

●喪中期間は？

お祝い事や神社参拝の予定とご不幸が重なり、お困りの方からのご質問も多くなっています。

時代や地方によって様々なしきたりがあり、統一した規定はないのが現状ですが、日常の生活において避けて通れない、気になる問題ですね。

ひとことで喪中といっても、「服」と「忌」の期間があります。「服」とは「心喪」のことで、人それぞれで悲しみの度合いは異なるものの、最長でも十三ヶ月とされていました。

「忌」は、神事や慶事を行わない期間で、概ねの目安としては、実父母五十日、祖父母三十日、曽祖父母三十日、夫の父母三十日、夫三十日、妻二十日、子二十日、伯叔父母二十日、兄弟姉妹二十日、従兄弟姉妹三日、甥姪三日とするのが一般的なようです。

しかし、やむを得ない事情がある場合は「除服」といって、事前にお祓いを受けることにより、神社参拝や慶事に参加することも可能です。

●年賀状は？

年賀状などは、ご不幸のあと一年間だけ送るのを差し控えるべきですが、受け取ることは問題ありません。年末までに先方に通知しなければならないわけではなく、必要であれば寒中見舞いなどでお知らせしてもよいかと思います。配偶者の祖父母など住居をともにしない外戚については服忌の対象にはならないとされていますが、とかく拡大解釈される傾向があるようです。

電子メールなどが急速に普及する世相の中で、年賀の挨拶もそれで済ませる若者が多いことの影響か、年賀状の販売数も減少しているそうです。元来は足を運んで親しく挨拶するものでしょうが、年賀状からメールへと変わってくる中でも、喪中のしきたりには過剰なほど関心を持つのは日本人らしさの故でしょうか。それとも、時代は変われども、「死」や「穢れ」に対する不安は変わらないと言うことでしょうか。核家族化によって身近に人の死にふれることが少なくなり、親から子への自然な形で死生観や忌み慎む心が受け継がれなくなった結果のようにも思われます。ともあれ生と死について向き合うよい機会ではあるのでしょう。

大阪天満宮所蔵古文書から③
大津事件で幻となったロシア皇太子の地車台覧

本年二月、冬期オリンピックがロシア・ソチで開催されます。黒海に面したソチよりはるか北方にサンクトペテルブルクがあり、ここはロシア帝国（ロマノフ王朝）の首都でした。

遠く離れたロシア帝国と当宮が思わぬ所でつながっていたことが、所蔵古文書から見つかりましたのでご紹介します。

ロシア帝国皇太子来日　御座船・地車を見物!?

明治二十四年（一八九一）、ロシア皇太子ニコライ（のちの皇帝ニコライ二世）は、シベリア鉄道の起工式臨席の途次、見聞を広める目的で来日され、長崎・鹿児島を経て、五月九日に京都へ入られました。

大津事件…明治24年5月11日、滋賀県大津で、護衛巡査津田三蔵が来日中のロシア皇太子を負傷させた事件。津田の犯行動機は、ロシア皇太子の来日目的が侵略のための視察である、また天皇陛下謁見前に各地を遊覧するのは不敬であると考えたこと、といわれている。

その前々日の当宮日記に、

「五月七日、高宮殿（大阪府社寺係）、此度露國皇太子来坂ニ付テハ、御座舟及ヒ地車見物ノ品ノ事ニテ来ル接滋岡氏、澤田氏（社用掛心得）堀川上荷茶舟仲（御座船所有者）へ依頼越ス」（「日誌簿」K2―25）とあります。江戸時代、元禄期製作といわれる山車形式の御座船（天神丸）と、地車を皇太子来阪の際にご覧頂くかの検討がなされたようです。

「八日、露国皇太子接待係リ香川氏、正午過高宮氏来社、午後三時頃府知事西村公、堀川餝り舟下見閲トシテ源蔵町小松宅ニ来臨、祠官寺井氏（他）、社寺係リ高宮殿・接待係リ香川三十郎出張、先舟ハ見合（略）、地車第四総（師）團ヘ餝リ付ル事、来ル十二日露皇太子来観ヲ供スル事」（「日誌簿」）。大阪府知事西村捨三が祠官寺井種清らと共に御座船の下見をします。残念ながら御座船は見合わせることになり、地車のみ大阪城内の第四師団に飾り付け、来る十二日来阪の皇太子に見て頂くことに決まりました。

大津事件により地車台覧は中止

ところが、来阪前日の五月十一日、皇太子が護衛巡査に切りつけられるという大事件が発生しました。

頭部を負傷した皇太子は、随行医官の応急手当の後、大津から列車に乗り、京都の常磐ホテルに帰着されました。事件翌日の日記には、

「十二日、露皇太子大津ニテ釼突遭難、祠官分局へ急呼寄合出張、露国皇太子遭難ニ付當地各神社ニ於テ御祈祷内恐（カ）告申来リ、當社午後祭典ノ上神官一人上京ノ筈、御供ハ大坂府へ、府社三社ノ惣代神官トシテ滋岡氏上京ス、官社ハ祈禱」（「日誌簿」）

但し、翌十三日に「御霊園殿、西上京ス旨通知アリ」とあるので、上京（京都）したのは滋岡祠掌から御霊神社の園八尋祠官に代わったようです。

学校は休校、各地の神社や寺院、教会までもが皇太子平癒の祈祷を執り行いました。当宮「本殿詰所日誌」にも詳しく記録されています。

「十二日、露國皇太子殿下、滋賀縣大津ニ於テ御遭難御負傷被遊候ニ付、御平癒御祈祷執行之上、神饌神符大阪府廳へ差出ス　神符ハ御幣御守箱入ニス、神饌ハ大折二鰹魚五・昆布六・梅鉢菓子七・沓形七・洗米紙包ノ五品ヲ納ム、右滋岡祠掌持参ニ付大道隨行ス」

（「本殿詰所日誌」K―24）

「地車」「露皇太子来観」の文字が見える「日誌簿」

お見舞いについてニコライ皇太子が自身の十二日の日記にこう記しています。「（前略）一日中、神社や学校、団体や商店からの見舞いの品物が庭から届けられてきた。見舞いの電報も数知れない。夜十時には天皇ご自身が二人の親王を連れて東京から到着された」（『最後のロシア皇帝ニコライ二世の日記』保田孝一著）

皇太子をお迎えするはずの地車が、現在天神祭で活躍している三ツ屋根地車（明治二十九年、天満市場奉納）だったとは、残念ながら史料からは確定できません。しかし、もしも大津事件がなければロシア帝国最後の皇帝ニコライ二世は、大阪の人のおもてなしと、地車の彫刻の素晴らしさを日記に記したかもしれません。

（文化研究所　宗石真由美）

第十回 あの人もこの人も

ご紹介するのは、天神橋の老舗和菓子屋「薫々堂」の店主、林喜久（はやし・よしひさ）さん（四八）です。

「薫々堂」は元治元年（一八六四）に、現在の大阪天満宮戎門前にて創業されました。天満宮より漂う梅花が香る様から屋号を「薫々堂」と名付けられたそうです。

代表的な御菓子の「銘菓 浪速津」は、一二〇年以上前に二代目店主が考案されたものです。現在も当宮にお客様がお越しの際には、必ず「浪速津」でおもてなししています。

薫々堂は、戦災で店舗を焼失し、四代目である祖父の喜蔵さんが戦後に現在の天神橋に再興し、今に至ります。御菓子作りの材料はもとより、日々の食事をとることすらままならない中、妥協を許さない祖父喜蔵さんは、代々受け継がれた味を必死に守ってこられました。

現在は喜久さんが六代目を務め伝統の味を守っておられます。祖父喜蔵さんに認められ店頭にだせるものを作るまでに相当な時間を要しながら、ようやく販売にこぎつけたのが「苺大福」です。これまでの概念を打ち破るこの御菓子は、薫々堂のみならず和菓子業界のベストセラー商品となりました。また、平成十八年に天満天神繁昌亭が開席すると、落語の演目に因んだ和菓子「ちりとてちん」や「千両みかん」など次々と新商品を生み出します。

そんな御菓子作りに余念のない喜久さんですが、その傍ら、天神橋三丁目振興町会、振興組合、また、当宮の青年親睦会などにも所属され、商店街や地域の振興活動にも尽力されておられます。

喜久さんは「これまでの人生の節目々を天神様に見守られながら過ごして参りました。家業を継ぐ現在も、日頃から天神様と関わりのある商いをさせて頂いております。氏神様に見守られ、地域の方々に可愛がられ、先祖の残してくれた宝物を守ること、一期一会の思いとお陰様の気持ちを忘れずこれからも頑張って参ります。」とおっしゃいます。

大阪天満宮献詠　風月社　平成二十五年下半期秀歌

日を受けて放牧の牛おのもおのも
乳になるらむ若草を食む
顧問　關　俊一

雲もなく皆健やけし仰ぎ見る
今宵の月見永久に忘れず
顧問　淺井　與四郎

清けみつ富士湧水のきらひあひ
川なす流れはるけさたゝゆ
幹事　佐野　秀子

秋風のそよく嵯峨の辺月清く
龍頭船よりなかむ名月
幹事　森本　美也子

祭壇に献華されたる萩すゝき
秋の七草月に影なす
幹事　松村　曉二

生け花のロビー飾れる球形の
菊の豪華さしはし見とれる
堺　永田　民子

爽涼の里山ゆけは一面に
可憐な野菊むらさきにほふ
吹田　岩城　富子

伊勢神宮五十鈴の川の清流に
みそきの祓ひを旅人かせり
大阪　松村　龍太郎

大輪の花に雨露しのはせて
いつしか菊は香を放ちをり
神戸　鈴木　敬子

ふる里の小川の水は清くして
螢とひかふ初夏の夜なつかし
東大阪　中山　里江

菊の香に誘はれ惑ふ菊慈童
七百年を若きまゝ老ゆ
西宮　牛田　眞理子

秋風に虫の音しみるみやしろの
清けし月の照る萩の露
豊中　西岡　克啓

富嶽よりいくとせかけて湧きいてし
神おはす泉永久に晴かれ
大阪　金生　久夫

床の間に活けし黄菊のあてやかさ
ふすまを開けは香りたちくる
大阪　西脇　か津

屋久島の清流吸みて旅茶碗
お薄茶たてて嘻々として笑む
堺　土田　喜久子

ふしの山透ける湧水砂を吹き
泉の水はあふれるはかり
大阪　中瀬　央子

懸崖の菊に並ふや作者名
空の青さに誇るかにして
堺　竹久　英子

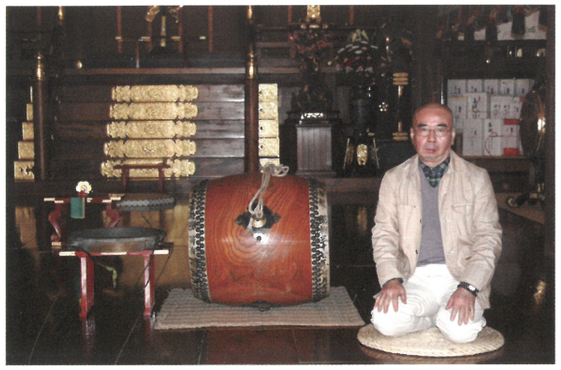
新宮に遷り坐します皇神に
み乃り豊けく御饌たてまつる
禰宜　柳野　等

旧どんどこ船の太鼓と鉦

十月三十日、榊講の講員である白山五朗様から、昭和三十九年ごろまで天神祭に航行されていた、どんどこ船の太鼓と鉦が奉納されました。現在の天神祭には「木場」のどんどこ船が一組だけ奉仕されていますが、古い時代には数多くのどんどこ船が出ており、昭和十二年には三艘が確認できます。

この度ご奉納の太鼓と鉦は、かつてこの船を取り仕切っていた酒梅組の依頼により「太鼓正」（JR芦原橋駅前）が製作したものです。

船渡御にご奉仕されなくなったあと、白山様の御父上様が譲り受けられ、長らくお宅で保管されていたそうですが、時が経ち、榊講の結成時に白山様もご参加になり、天神祭に奉仕するご縁ができたことから、この度のご奉納を思い立たれました。



「太鼓」
昭和三十七年七月吉日之張
大阪市浪速区栄町一丁目五番地
諸太鼓製造元
（正）太鼓正　謹製
胴長　六十四cm
胴経　六十三cm
鼓面　五十三cm
「鉦」
昭和参拾九年七月吉日
大阪　酒梅組
多田　造
中尾　匠
外径　四十六・五cm
内径　四十三・五cm
縁高　六・五cm
重量　三十kg

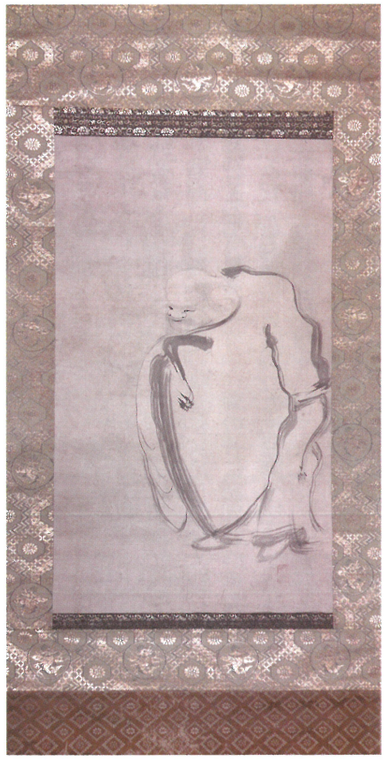
奉納品のご報告

後陽成天皇宸翰 御絵『老子図』軸装

十一月三日、守口市の西窪清人様より、後陽成天皇宸翰（天皇の直筆）御絵『老子図』が奉納されました。西窪様のことは、松山玖也筆『道の記』などのご奉納の際に、当社報六四号でもご紹介しましたが、続いて今般もご所蔵の収集品の中からご奉納を頂きました。

後陽成天皇（一五七一～一六一七）は、豊臣秀吉の全国平定から徳川家康の政権確立に至る時代にかけて帝位にあった、第一〇七代天皇です。公家社会が漸く安定し始めた時代でもあり、朝廷権威の回復を示す意図からも、公事儀式の復興などに力を注がれました。また、国学にも造詣が深く、『伊勢物語愚案抄』『百人一首抄』など、古典に関する述作も少なくありません。木製活字（いわゆる慶長勅版）を作らせ、『古文孝経』『錦繍段』『勧学文』『職原抄』その他和漢の古典数種を印行させるなど、文化史上に大きな功績を残されています。実は当宮には、この慶長勅版の『日本書紀』を収蔵しています。

今回ご奉納いただいた『老子図』は、近衛家伝来とされ、親王時代のものと思われる後陽成天皇の落款と後西院天皇宸翰の御外題があり、箱書きは家仁親王の御筆、と鑑定され、また保存状態も良好で、文化財的価値の大変高い絵画です。



大阪府神社スカウト協議会 四十周年記念「富士登拝」

権禰宜　糸数智子

平成二十五年八月三日（土）午前七時三十分、大阪天満宮を参拝、天満宮スカウト六十一名はバスに乗り込み、富士山へと出発した。

途中大阪府全域の神社スカウト各団は浜松インターにて集結。参加総数二〇〇名は富士登山の安全祈願をするべく、静岡県富士浅間大社へむかった。浅間大社中村徳彦宮司様をお迎えし、四十周年記念セレモニーが執りおこなわれ、宮司様に記念品が贈呈された。カブスカウト、ブラウニー・ジュニアスカウト達は浅間大社にて宿泊させていただくため、風穴見学へ向かう。

今年世界遺産に登録された日本の誇り高き霊峰富士。バスの中では大きな壁のようにそびえ立つ富士山に歓喜の声をあげた。五合目までは美しい優しさを讃えるような姿。まさしく木花佐久夜比売命、などと美しさにうっとりとしているのもつかの間、いよいよ登山の重装備。

十周年毎の登拝、今回で四回目を迎える記念行事。あいにくの天気だが、午後五時から五合目出発、下を見ると雲を通して稲光のような光が何度も走る。危険なのだろうかと不安になったが、自衛隊の演習と判りホッとした。山道は岩だらけ、だんだんと険しさが増してくる。

七合目あたりで疲れが増す。八合目の山小屋で睡眠を取り、午前二時頂上を目指し出発。九合目あたりから雨風もかなり強くなり、身をかがめてじっとしていなければ飛ばされる程の風でした。下山したい！

午前四時山頂に到着。九十八団リーダー・スカウトの姿もありました。山頂は本降りの雨。辺りはまだ暗く下山も危険なので、山頂の浅間神社や山小屋が開くのを待ち、一時間以上雨に濡れて冷えきった体をカップ麺が優しく温めてくれました。登頂ばんざい。

土居総代表彰

この度、当宮氏子総代、また天神橋三丁目商店街振興組合理事長を務めておられます、土居年樹様が、四月二十九日発令の春の叙勲において、旭日双光章を受章されましたことをご報告申し上げます。

帰幽報告

十月二十八日
天神祭講社連合会顧問
前田　正様（享年六十六歳）

十一月十五日
氏子総代
植西　盛雄様（享年八十七歳）

十二月四日
氏子総代
勢山　孝藏様（享年百二歳）

十二月十日
氏子総代
鳳講　講元
小林　俊行様（享年六十八歳）

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

人事任免

〈転任〉
平成二十五年十一月一日付
禰宜　粟　辻　勲
（難波八阪神社へ）

同心保育園来宮

十一月一日、たくさんの小さなお客様がご来宮下さいました。「同心保育園」（北区同心）の皆様です。

かつて、神社は子どもたちの遊び場として、定番のスポットでしたが、いつのころからか境内で遊ぶ児童や園児の姿を見かけることが少なくなり気にかかっておりました。しかし、ここ最近は、こうしてたくさんの園児たちがお参り下さるようになりました。嬉しいことです。同心保育園の皆様も、月に一、二度は境内にお出かけ下さいます。

賑やかな園児たちも、ご神前に向かえばきっと背筋を正し参拝します。先生方や神職から教わった参拝の作法を一生懸命実行している園児たちをみていると、こうして信仰が受けつがれていくのかと、感慨深いものがあります。

参拝後、境内亀ノ池で亀や金魚に手を振る姿がなんとも愛らしく、目にする全ての人々の心を和ませて下さいます。

神社の杜に子供達の笑顔と笑い声は本当にいいものです。

同心保育園だけではなく、地域の園児たちの憩いの場に利用していただければと思います。四季折々の風情を感じに、是非またいらして下さいね。

皆様はもう参宮されましたか。

編集後記

この度の第六二回神宮式年遷宮では、内宮・外宮の正殿をはじめ、両宮正殿、宝殿外幣殿、御垣、鳥居、御饌殿、十四別宮など、計六十五棟が新たに造営され、また、約八百種千六百点の御装束神宝も古代のままに新しく調整され、殿舎内に納められました。

この機会に参宮される方も増え続け、昨年だけで一千万人を超えました。喜ばしいのは、参宮数の多さ以上に、従来の遷宮に比べて、今回は若い女性のグループや家族連れが目立つことでしょうか。当宮の氏子さんにも家族で参宮された方が多いようです。

大阪天満宮社報
てんまてんじん 第65号
平成25年12月25日印刷
平成26年1月1日発行
発行人　寺井種伯
発行所　大阪天満宮社務所
〒530-0041 大阪市北区天神橋2―1―8
TEL 06-6353-0025
印刷所　木村印刷株式会社